The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ R. Fulton and R. Bendiksen, ”DEATH & IDENTITY (Third Edition), The Charlse Press, 1994
Author(s)	樋口, 昌彦
Citation	年報人間科学. 1997, 18, p. 241-245
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12206
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

R. Fulton and R. Bendiksen

DEATH & IDENTITY (Third Edition)

The Charles Press, 1994

樋口昌彦

本書は死にまつわる様々な現象に関する論文を編集した論文集であり、タイトルからもわかるとおり過去に出版された書を新たに改訂し出版されたものである。今回取り上げるのは第三版であるが、過去の版である初版および第二版については死の社会学の概論を論じている論文において以下のような紹介がなされている。「フルトンによって編集された本書は、一九六五年に出版され一九七六年に改訂されており、死に関する議論の基本的土台を作り上げている。その議論においては死に関する理論的な考察、態度や反応、葬式、そして社会組織や社会に対して社会学的なパースペクティブが用いられている」[1]このような紹介がされていることからも、少なくとも当時の死の研究の基礎をなす業績だったことがわかる。しかし本書は過去二版とつきあわせて比較してみると全く新しくなっているという印象がもたれる。それは、内容の面において初版から第二版への改訂にはある程度重複部分があったのに対し、今回の改訂は二十年近いブランクをおいて完全に新しいものとなっていることに因っている。また初版においては社会学者でありミネソタ大学の「死の教育と研究」センター所長でもあるR・フルトンが単独で編集にあたっていたのに対し、第三版ではウィスコンシン－ラクロス大学の社会学の教授であるR・ベンディクセンが新たに正式な編者として加わったこともおそらく一因となっているであろう。このように六〇年代および七〇年代に出版されたものを充分な間隔をおいて九〇年代に全く新たに改訂したものであるという意味において本書は興味深い。これらの点に十分に留意しながら本書の要約・解説を試み

たい。

本書の構成は十六の章からなり、それらは内容的にＰＡＲＴ１から４に区分されている。ＰＡＲＴ１においては主に死にまつわる概念の理論的研究、ＰＡＲＴ２では死に直面した周囲の人々の心理状態、具体的には主に悲嘆感情に関する分析について、ＰＡＲＴ３においては死に対する社会的なリアクションに関する分析、ＰＡＲＴ４では特に最近問題とされる傾向にある死に関するトピック、具体的にはAIDSやホスピスケア問題についての研究などが集められている。もちろん本書は論文集であるから、様々な分野の複数の筆者による論文を"Death and Identity"という題のもとに集めてあり、全体として統一されたテーマの過不足のない論証にはなっていない。この点を十分に念頭において主に四部の構成に着目し、ＰＡＲＴ１と４およびＰＡＲＴ２と３を括り、それぞれの代表的な章から明らかになる点を記すことにする。というのも本書を通してみると前者においては特に今回の改訂の特徴がよくあらわれているという共通性があり、後者においては対として考えることで、本書の内容の豊富さ、範囲の広さ、あるいは社会学的に死を分析する際のひとつの基本的な方向性への示唆を示していると感じられるからである。このような二点を主題とし、それぞれのパートにおいて重要であると思われる論文をピックアップし書評をすすめることとする。

まずＰＡＲＴ１では、第二章において死を論じるための主要な三つの社会学的方法論が整理され論じられている。第一番目はシンボリック相互作用論の視点からの死である。この観点では様々な人が同じ死の現実に直面するにもかかわらず、それぞれが同じ意味を共有しないことに注目し、インタビューなどの手法を使ってその点を解明することに特徴があると述べている。二番目に取り上げられるのは機能主義からの視点である。これは我々が医療の発達に伴い社会的役割に応じて子どもや働き盛りの人々の死を不適切な死、高齢者の死を適切な死として理解する傾向を挙げ、このような社会および社会役割と死の関係を明らかにしようとする考え方である。そして第三番目にはマルクス主義の視点を基本とした死の議論をあげている。医療ケアの社会的不平等の問題、そこから個人の死亡率の不均等問題に迫る方法を解説している。これに続き第四章では死の社会学の学説史の展開がまとめられている。まず死の社会学の萌芽をヨーロッパにおけるスペンサー、デュルケム、エルツなどに求め、一九世紀末から二〇世紀における社会学者の業績について紹介している。続いて二〇世紀前半における主にアメリカの社会学者による家族と死別の関係の研究について、そして二〇世紀後半の社会学者のパーソンズ、グレイザーやストラウス、サドナウの業績などが紹介される。また現代の代表的な死の社会学のテーマとしては、社会階層と死、死にまつわる職業、死別の感情に関する研究などを列挙し解説している。

このように、ＰＡＲＴ１では死の研究の方法論や学説史的展開のような主に死に関する抽象的・理論的なテーマを扱っている。序文において編者は「この版ではとくに死に関係する現象について理論的観点をまず明らかにし、社会学的分析枠組みおよび方法論的テク

ニックを紹介する」（序文一五頁）と記しており、その方針がこのパートには顕著にあらわれているといえるであろう。

つづいてPART4についてであるが、第十四章においては現代アメリカの高齢化社会におけるホスピス運動がテーマとなっている。まずホスピス運動が活性化した背景の説明として、ターミナルケアの技術の進歩による余命の限られた人々の出現、そしてそれに伴う死にゆくことの問題化があげられている。そしてそのような背景において活性化してきたホスピス運動が、患者と家族の関係を結ぶ新たなネットワークや生と死の意味付けの新たなあり方を社会に与えていることを指摘している。またこのようなホスピスの社会的な機能の分析に加えて、死と戦うことを放棄してしまうことへの懸念や早すぎる死の決定を避けるべきであるというホスピスのあるべき姿に対する考え方が提出され締めくくられている。続く第十五章においては、アメリカにおける社会的な脅威としてのAIDS問題がテーマとなっている。まず、AIDS自体がどのような歴史をたどってきたのか、および社会がAIDSにどう対応してきたのかという背景について言及された後、AIDSの恐怖の社会的な構造の分析として、これまで死との関係が少なかった若者に深刻な影響を及ぼしている事実や、外科手術における汚染血液による感染の問題などについて指摘している。そして章末においてはAIDSという現実問題に対して社会科学者がとるべき態度について、具体的には社会科学者が調査者および教育者として働くことによってAIDSの拡大の抑制に貢献しうる、というような筆者なりの意見が記されている。

PART4の特徴は徹底的に現実に即した章になっていることであろう。このことは、現代社会において問題視されているトピックを選択していることや、議論を具体的現象を素材として組み立てていることからも明らかである。そしてそれに加え、主張の中心ではないにしろ、死の問題に対する理想への言及が存在することがさらにそれを際だてているように思われる。あるべき理想に言及することとは、現実の分析とその問題点の指摘抜きではなしえない。このような発想は必然的に無味乾燥な机上の空論に陥ることを避け、論考をきわめて実践的なものとすることにつながっている。このように現実から遊離した研究でなく、あくまで実践的な研究であることは大いに評価される。しかし、このことは評価されるべき点であると同時に若干の批判されるべき要素も含んでいるといえよう。それは、理想像への言及をも含んだ徹底した実践性において、ターミナルケアにおける死にゆくことの問題性やAIDSの社会的な問題性をすでに存在する自明なものとして理解している点にある。本書においては全く言及されていない、問題性とはどのように構成されるのかという問い、あるいは逆に問題のない死とは何なのかという疑問についても、ある程度の議論がなければ不十分なのではないだろうか。

ともあれPART1と4において、本書が第三版であることの特徴が顕著にでていると言ってよいであろう。その特徴とは、PART1の理論的論考においては過去の二版では精神医学的な分析や人類学的な研究が多くの部分を占めていたのに比べて、死という現象

に対して社会学的に接近することについて特に焦点が絞られている点である。またPART4が今回の改訂で初めて設けられた部分であり、八〇年代以降になって特によく注目を浴びてきているテーマが選ばれているという点もそれを表している。

次にPART2および3について取り上げる。PART2においては主に死に直面させられた周囲の人々の悲嘆の感情の考察がなされている。その中で第五章ではイギリスの精神医学者が子どもがどのように死に直面し、そしてどのように悲嘆感情を持つかについて分析している。特に子どもの悲嘆現象の大人との相違性、死別を経験した子どもと精神的な疾患との関係性、死別を経験した子どもを受けいれる環境などをテーマとしている。つづいて第六章では人々が死に直面した場合、心理学的にどのような段階をたどって悲嘆し回復していくかについて、次に悲嘆が引き起こされる社会的な状況について、そして悲嘆の特殊な事例として、異常な悲嘆や先取りの悲嘆について論じている。先取りの悲嘆とは、医療の告知による死の先取りから、本来ならば死後に起こるはず悲嘆が死が起こる以前にはじまる状態のこととしている。

PART2においては死別と悲嘆の感情とが一致したものとして扱われており、その上悲嘆は好ましくないものであるという理解がなされている。そのことから第六章において（一）死別（二）周囲の人々の悲嘆（三）悲嘆のプロセスの完成（四）悲嘆の解消、という段階が提示される。しかしこの段階は基本的に悲嘆に暮れる人々をその状態から立ち直らせることを前提としているため、価値中立的な分析枠組みとしてではなく悲嘆者への処方箋的な性格を持っている。ゆえに死の悲嘆を前提としないような、より複雑な死に対する感情のしくみについてはここでは扱われえないのが残念である。しかしながら豊富な事例によって人々がどのような悲嘆状況におちいるかの分析は緻密であり、十分に論じられている。また特に第六章で取り上げられている先取りの悲嘆の概念は、二重の意味において興味深いものになっている。その概念はR・K・マートンが準拠集団論において論じた先取りの社会化（anticipatory socialization）の概念としくみの上で近似していると言えようが、マートンによる適用は身分の上昇という非常に狭い範囲に限定されていたのに対し、先取りの悲嘆の概念には現代人の死に臨む態度という多様かつ興味深い事例への適用の可能性があるという面が興味をひく。また本来の死別による悲嘆との区別においても、死と悲嘆の構造の逆転から、一義的な死イコール悲嘆という理解を越えた感情のしくみの把握への可能性が開かれていることがもう一つの点である。

PART2は個人的な感情を軸とした分析であったのに対し、PART3では社会が死という現象に対して用意するリアクションについての考察がなされている。まず第八章で死別という経験に直面した家族がそれをどう受けとめるかについて論じられる。特に家族内の死別について（一）子供と死別した親（二）配偶者と死別した大人（三）年老いた親と死別した大人に分類し、さまざまな事例の検討から家族構成員の反応のあり方を分析している。次に第十一章においては死への社会の反応の具体例としての現代社会における葬

式のあり方が取り扱われている。とりわけ現代アメリカにおける葬式のあり方の変化を指摘し、その要因としてアメリカ人の宗教意識、経済的要因、統計的要因、家族変動という四つを挙げている。また特に筆者が葬式の機能の分析から強調することは、葬式は死にゆく人々のために実行されるものであるというよりは、生き残った人々が葬式を必要としているということである。

ここでは、社会の制度が死という不安・不安定をどう扱うかというテーマが論じられている。人間以外の動物には仲間が死んでもそれを葬るという発想がないといわれるが、人間は他人の死に対し、葬式や、宗教的な理解、家族で対応するなど社会的に全く無視することができない。つまりPART3においては死の問題は死にゆく人の問題であるよりも、死別を経験する周囲の人々の問題である、という点を浮き彫りにしている。

PART2とPART3は、個人の感情に重点を置き心理面を強調した前者および社会に重点を置き社会制度を強調した後者の内容から、本書において両翼をなしているといえるであろう。そしてこの両者の対称性が本書の最大のメリットであると感じた。必ずしもそれぞれのパートにおいて必要十分な議論が完結しているとは言えないかもしれないが、比較的短い章を組み合わせている本書の構成からもわかるように、多様性が本書のもっとも大きな長所である。そしてその多様性というのはPART2と3における着眼点の対称性に多くを拠っているのである。故に、死に関して複数のバランスのとれた社会学的な論考を選択する際には、本書は薦められるものであるだろう。そしてまたこれらの二つのパートが両翼をなす一方、ここには共通したテーマも含まれている。それは、死をめぐる事象について周囲のものがどう対処するのかが一貫した主題となっているということである。これは、社会学的な死の分析のひとつの基本的な態度の示唆であるにちがいない。つまり精神医学的な発想で人間がどのように死を体験するのかについて焦点を当てるのではなく、社会において死とは何なのかを理解すること、あるいは死や死別が我々の日常生活において何を意味するのかということを明らかにする場合には、ここで共有されている態度は、一つの重要な前提となるものであろう。

注

(1) Elizabeth J. Clark, "Overview of Sociology's Contribution to Intervention in Life-Threatening Illness, Dying, Loss and Grief", *Clinical Sociological Perspectives on Illness and Loss*, Philadelphia, The Charles Press, 1990, p.2.